

45. 田の字形の間取り

民家の基本のように言われる田の字形の間取りは、摂津市域でもみられた。地主の家は、田の字形に1列ふやした形態をとっている。

◆100坪,200坪,300坪

前頁の追加説明である。敷地の大きさは、地主の家は300坪以上が標準。300坪といえば田の1反である。広い。自作農の家の敷地は約200坪で、150坪以上あれば1人前とされた。

小作人の家は敷地は100坪前後で、納屋が本屋（母屋）に付属しているが、母屋の間取りは田の字形のものも多かった。農業以外に何かと現金収入の道のある都市近郊農村の豊かさといえようか。

◆クラ・ハナレ

自作農の家にはクラ（蔵）をそなえることが多くなり、それに接してハナレザシキも刳漬けことがあった。地主では蔵の数が多くなってくる。

このように階層の差はあっても、同じく農業である以上、粃や豆を干し広げるカド、わら仕事などの作業場を兼ねる納屋、ウマヤ（牛小屋）を備えるという機能面では共通点をもっていた。ただし前頁の概念図では、ウマヤの位置は聞き落としていた。

◆田の字形の4部屋構成

〈A〉は標準的自作農の家のモデル。ヘヤ・ダイドコロの日常生活の奥の列に、客を迎える座敷を足して前後2列の構成となる。座敷に縁側をそなえ、裏に上の便所を付けることもあった。

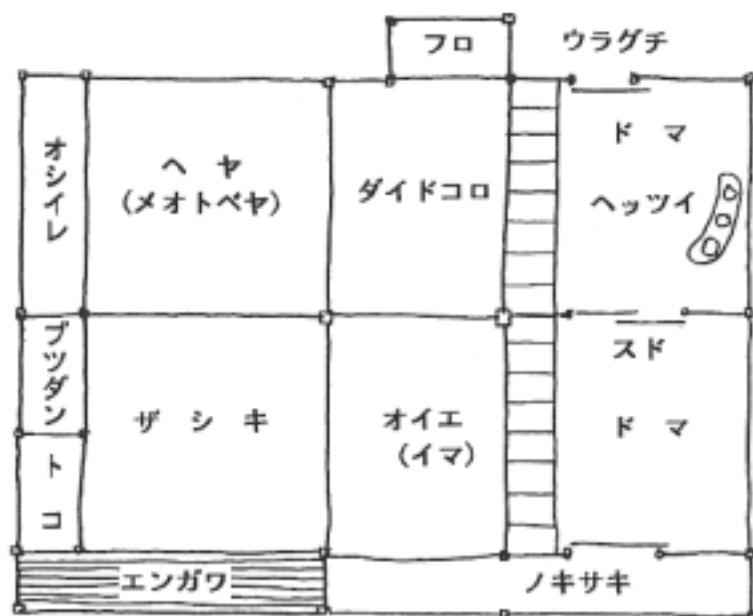
ノキサキは、瓦葺きの半間のひさし（庇）を出したもので、前頁の小作クラスの家にも見える。

◆ミマツヅキ

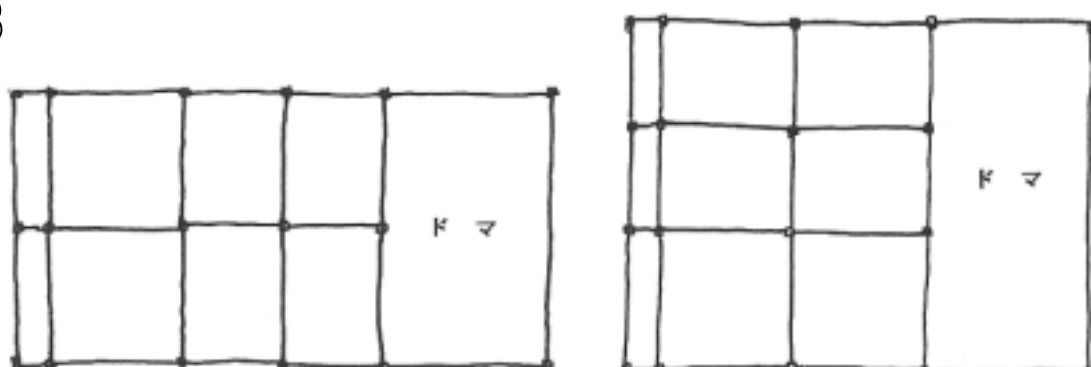
〈B〉はミマツヅキのバラエティ。地主の家になれば、田の字形に1列増やして3間続きとし、ミマツヅキといった。横に3間とればいいが、敷地の関係で縦に3間とる場合もあった。縦に3間とった場合の仏間などは光の入らぬうっとうしい部屋となった。

〈C〉は別府のN家の例。3間続きの土間側に1列加えて4列の構成になっている。上位の客はシキダイのある玄関に迎えて、ザシキ（座敷）に通す。図の左端の通路からクラとハナレに通じる。米蔵、衣装蔵、道具蔵とその奥に6畳、4畳半の離れ座敷が廊下でつながっていた。また道を隔てた向かいにも蔵が1棟あったが、水害で流れたという。

A



B



C

